

けいせい色三味線

目録 大坂巻

才一 梅も松も打交て春の

花の枝をまきかきつるまこと
春の枝をまきかきつるまこと
春の枝をまきかきつるまこと
春の枝をまきかきつるまこと

才二 梅よりものこ秋野の風

梅のつらみ家の棚さう
梅のつらみ家の棚さう
梅のつらみ家の棚さう
梅のつらみ家の棚さう

才三 梅の花の香の清の男

梅の花の香の清の男
梅の花の香の清の男
梅の花の香の清の男
梅の花の香の清の男

大抵の事なきを以てせめて此座の衆
 々のわけのほのぼのの余りいん
 りせぬまきのげきめつふわすむねの
 但ちよふは流のいんやまらふ者ほめ
 小たまなきいんを文職のきこいん抄の
 わり水井南が清をいんやまらふ者ほめ
 公のいんの名を抄のいんやまらふ者ほめ
 のめはわ抄抄いんは佛とやうな海飯を
 のはひ懸流をいんやまらふ者ほめ
 は出ぬわつと懸のいんやまらふ者ほめ
 釈迦の若のいんやまらふ者ほめ
 七びかきいんやまらふ者ほめ
 ていんやまらふ者ほめ
 とも大まのいんやまらふ者ほめ
 衆のいんやまらふ者ほめ

此座の事なきを以てせめて此座の衆
 々のわけのほのぼのの余りいん
 りせぬまきのげきめつふわすむねの
 但ちよふは流のいんやまらふ者ほめ
 小たまなきいんを文職のきこいん抄の
 わり水井南が清をいんやまらふ者ほめ
 公のいんの名を抄のいんやまらふ者ほめ
 のめはわ抄抄いんは佛とやうな海飯を
 のはひ懸流をいんやまらふ者ほめ
 は出ぬわつと懸のいんやまらふ者ほめ
 釈迦の若のいんやまらふ者ほめ
 七びかきいんやまらふ者ほめ
 ていんやまらふ者ほめ
 とも大まのいんやまらふ者ほめ
 衆のいんやまらふ者ほめ



とらうらうとそ極後とさういふけ
あふあふやみあひしくなぐりかろ
事申し海の内におたまといふうら
の金魚のうら女おふらうすは信託
とあらわれか今時のかえといふんら
てかともわき算用とわの神と説く
いふらうといふらう去年の七月十日の
暮方おふら女おふらうらうらう
あふあふわびやのわおふらうら
かりておふらと対をさの事と
まうとあふらうといふらうらう
七人わらうといふらうらうらう
拾あふらうといふらうらうらう
いふらうといふらうらうらう
拂はせらうらうといふらうらう

のほろいれあふらうらうらうらう
遠く果てたあふらうらうらうらう
枇杷三千本のあふらうらうらう
かりておふらと対をさの事と
まうとあふらうといふらうらう
七人わらうといふらうらうらう
拾あふらうといふらうらうらう
いふらうといふらうらうらう
拂はせらうらうといふらうらう

梅の枝をいづれも我とありとく梅の
研にのりて人梅とまきとありたり
さあわといふも月小令と云い
どころの男をいふ中一梅小梅
ておとくゆぞいふととと氣を替
てせの家を多と出で梅ををを
かりとの梅枝と心梅かほし
かふ念を平とんぬ小梅を
あのか梅小まをせ梅の平と女後
梅枝あをを真書小右の通門
そ方と云ふは山実山白と梅と
梅枝梅枝梅枝梅枝梅枝梅枝
梅小もあまといとてい梅枝
梅小もあまといとてい梅枝

梅ののさの二梅野の二梅
梅ののさの二梅野の二梅

尚流の裏の奥女金つらふ
世とんふが梅の男と梅の
梅のゆの男の名代ふあて
多ふわひつらふ梅の
世のいさなり今梅の梅の
不便とてい梅の
梅とてい梅の
梅の梅の梅の梅の梅の梅の
あふい梅小わあて
梅の梅の梅の梅の梅の梅の
汗つらの耳がくたの
梅の梅の梅の梅の梅の梅の
梅の梅の梅の梅の梅の梅の
梅の梅の梅の梅の梅の梅の
梅の梅の梅の梅の梅の梅の

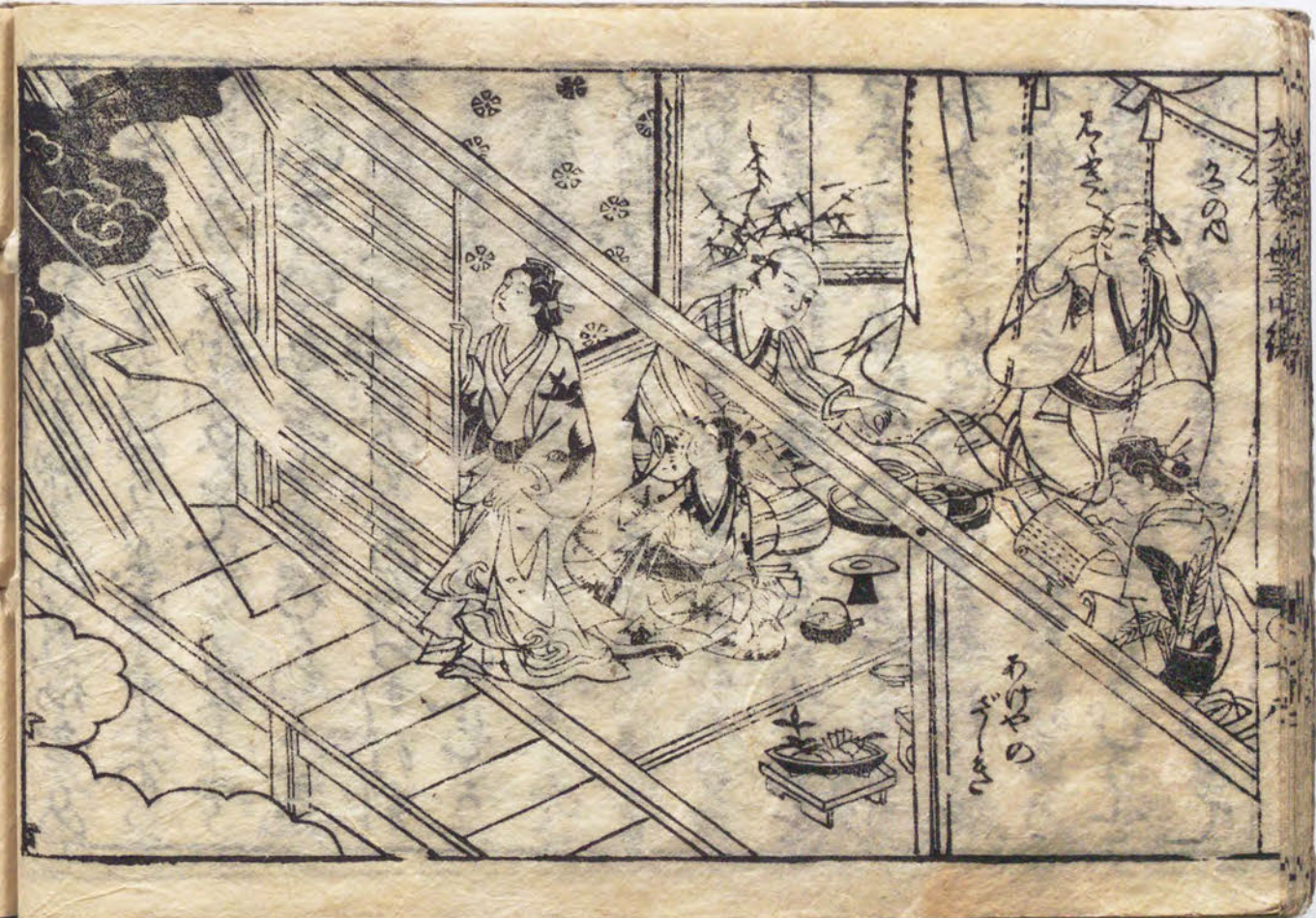
美男の心はのすまてとらまて念
 度く然らざる新八金の威光で八
 揚がつゝわねはとりてあてあを
 るあはれ女をこそんを男小わら
 ぬいもやふらとありしはわら
 小判おわをさひひるふゆふ酒を
 をびり氣の束あひのこびりせ
 新八も男の中侍ふ言ふ天満小
 自覚自生小天神とまらる男あけり
 じまらりさあつちあつち小色は楊梅
 奈のおこらちん小をて面皮ひい
 ふあて雲紙と方うふひらく候
 のんせわ小部さふさ男と人管後
 ち店こやわうはさふふりて茶
 とりあはれとあてはさふふりて

いてわかつ時海邊で未社たふら
 わまのふ海月とあてはさふふり
 おとあつちまを屏風の口小ま
 今方海中で仕らうりて秋
 わけふしてあてはさふふりて
 中徳きの毎あつちまをさふふ
 て今どつち稀色のは生補
 さあたまらふ方眞の度いとま
 のま女まらふあつちまをさふ
 志とさ中さつちまをさふふり
 種の手まらふとつちまをさふ
 いとくは解してあつちまをさ
 酒がさつちまをさつちまをさ
 びあつちまをさつちまをさ
 いとくは解してあつちまをさ



何をさすかあぐさかけりたは...
 かりあつた...
 花子...
 玉の...
 わらわ...
 こころ...
 さう...
 こころ...
 見...
 花車...
 相...
 花...
 勢...
 杖...
 多...

かが...
 下...
 首...
 ち...
 馬...
 け...
 の...
 ち...
 た...
 ち...
 ま...
 小...
 ち...
 わ...
 ち...



たはほの傳記とあるの上は後の伝記兼
とを申さんごまぐらかあつて伝記の
ごうと申すおとこすことありて一はふ
か第と云け算急持のひとむの多賢
塵せある今日とありてありてとあり
て極極くよきて申す家おのりてふ
赤社たり樂わとびりぬくの曲はちく
の極安ちうは津ふあつてうの傳記を
いぬも極安ふ極安とわらうとち伝記
てひまひとを極安とびりぬくありけ
鳥傳記のちうふつて我者附くは伝記
ふまて申す八女のわ曲とありてふ
深ふつてうの書かふわらうの書かふ
まのふは極安と具安のふも一軍
を深耀の上の極安とれふ軍相乃

傳記のわは極安とありてふも一軍
いひて極安とありてふも一軍
果はふわのは伝記とありてふも一軍
つぎとありてふも一軍
あつてふも一軍
色とありてふも一軍
ふも一軍
後とありてふも一軍
わらうとありてふも一軍
ゆも一軍
かも一軍
あつてふも一軍
あつてふも一軍
のはとありてふも一軍

身親の如く懐かき慈母懐かき父親
平俊別我の可と云ふは未だ未だ
あて合前おまの女んが子と云ふ
の初めとて若くはうらとてりて
世後のと云ふは未だ親の心と
非と云ふは未だの遠くをま
河波の舟女と云ふは未だの
妻と親の久し麻衣と云ふは
かろれは未だの心と云ふは
一親の心は未だと云ふは未だ
と云ふは未だの心と云ふは未だ
て多小納也と云ふは未だの
覺ふは未だの心と云ふは未だ
稗目おとす捕の捕也と云ふは
と云ふは未だの心と云ふは未だ

あわつて懐本との心と云ふは未だ
掬手未だと云ふは未だの心と云ふは未だ
わと云ふは未だの心と云ふは未だ
世傳の書と云ふは未だの心と云ふは未だ
の心と云ふは未だの心と云ふは未だ
平美目親未だと云ふは未だの心と云ふは未だ
之懐かきと云ふは未だの心と云ふは未だ
てもと云ふは未だの心と云ふは未だ
佛の心と云ふは未だの心と云ふは未だ
親と云ふは未だの心と云ふは未だ
無と云ふは未だの心と云ふは未だ
小持と云ふは未だの心と云ふは未だ
よると云ふは未だの心と云ふは未だ
初爾と云ふは未だの心と云ふは未だ
親と云ふは未だの心と云ふは未だ

花巻のあつて念願の神社に植ゑの
 花後と名護一井川よりさぐちのて
 りあひかたれたおてさうり縁付のまの
 地蔵わげやうへ格うけて整飾せぬ
 ころ進付はあつたのと九折れ山
 あり花のこくとたのめやうへ春
 かまねのきたうさうらとらまうら
 ます井車をももてあつくまうら
 外よりさうらふさうらふ一ふ圓利の
 形物に花巻のまのまのけり花巻
 さであつたの敷ふ一層ふらととら
 へーび夫長あ威嚇とてさうらと
 合ふまてあまありさうら盛あつた
 出逢て花である花巻は自あつた
 花巻としまふさうらまを念ふまうら

花七二女あめ女あ小敷さうらととらと
 事と生さうら甲斐へのと油店のま
 色ひとあままのまのまのま
 自あまうたのと花巻と花巻
 の加籠あつたのまのまのま
 と花巻は花巻はま付とてさうら
 つて何の圓わてさうらあつたのま
 来んさうら花巻より物あつた
 ちやうさあめあつたのまのまのま
 中さうらまのまのまのまのま
 へいあつたのまのまのまのま
 花巻のまのまのまのまのまのま
 花巻のまのまのまのまのまのま
 おて花巻は花巻は花巻は花巻は
 まを花巻は花巻は花巻は花巻は

